

『十席、海へ行く。』

——ヨルファミリア水着回——

黑夜事変も深淵も古代施設も今日だけは——全部、お休み。
始まりは、ヨルのたった一言だった。

「みんな。海、行こっか」

その翌朝。ヨルファミリア本部の玄関には、十人分の荷物と——
——浮き輪七個。ビーチボール三個。水鉄砲十丁。パラソル二本。
巨大なシャチ型フロート。そして——

「なんで俺が全部持ってるんだ」

荷物の山から、トムカスの声がした。

「似合ってるよ」

レモンが笑う。

「何がだ」



「荷物」

「褒めてないだろ」

「褒めてる褒めてる」

その横を、ごま塩が小さなリュック一つで通過する。

「出発ゴマ！」

「待て」

「ゴマ？」

「そのリュックの中身は？」

「お菓子ゴマ」

「物資担当どこ行った！？」

朝から騒がしい。こうして、ヨルファミリア史上もっとも平和な作戦——

《海水浴作戦》

が始まった。



1 十人、海へ

海へ到着して最初に飛び出したのは、なっちだった。

「海だーーーーっ！」

砂浜を駆ける。

「お姉様！ 早く早く！」

「転ばないでねー！」

ヨルが笑って手を振る。その横を――

「海ゴマァァァ！」

ごま塩が追い抜いた。

「負けません！」

「勝負ゴマ！」

「何の！？」



ヨルの疑問を無視して二人は海へ突撃。その直後。ざっぱーん。

「冷たいゴマァァ！！」

「冷たあああい！！」

二人とも戻ってきた。

「何しに行ったの」

あめちゃんが笑う。その隣で、にゃんこは腕を組んでいた。

「子供ね」

「にゃんこも行こ！」

「嫌」

「行こ！」

「嫌だって」

あめちゃんが手を掴む。

「ちょっ——」



そのまま海へばしゃーん。

「……………」

全身ずぶ濡れになったにゃんこ。あめちゃんが恐る恐る笑う。

「楽しいね？」

「……あめちゃん」

「はい」

「覚悟しなさい」

「え」

反撃開始。

「きゃあああ！」

「待ちなさい！」

開始三分。あめちゃん＆にゃんこの追いかっけこが始まった。



少し離れたところ。ゆーカスといんカスは海を眺めていた。

「綺麗だな」

「そうだな」

「いんカス」

「ん？」

「泳ぐ？」

「いいよ」

「じゃあ競争」

「負けないけど」

二人同時に走り出す。だが、三歩目。ゆーカスが止まった。
いんカスも止まる。

「……日焼け止め塗った？」

「忘れた」

「俺も」



二人同時に戻ってくる。トムカスが呟いた。

「息ぴったりだな、お前ら」

「「まあね」」

「そこまで揃えるな」

そして、女子更衣スペースから最後に現れた三人。レモン。
まふい。ヨル。最初にレモン。黄色と白を基調にした明るい
水着。

「お待たせ」

トムカスが一瞬だけ止まった。

「……………」

レモンが気づく。

「なに？」

「いや」



「見てた？」

「見てない」

「へえ」

一歩近づく。

「じゃあ、似合っていない？」

「誰もそんなこと言っていないだろ」

「じゃあ？」

「……………似合ってる」

レモンがニヤッ。

「ありがと」

「……くそ」

その様子をあめちゃんが見ている。にゃんこも見ている。なっ
ちも見ている。ごま塩も見ている。

「「「「おおー」」」」



「見るな！！」

トムカスの声が響いた。

次に、まふい。黒を基調に、紫のアクセントを入れた水着。もちろん首には——いつもの黒いチョーカー。管理と解除判断をヨルへ委ねている、大切な鍵付きのチョーカー。

だが、まふいは自分が見られていることなど気にしていなかった。視線はただ一人。最後に出てくるヨルだけ。そして、ヨルが姿を現す。黒と深紅。普段のヨルを思わせる色合いながら、夏らしく軽やかな水着。

長い黒髪が海風になびく。赤い瞳が眩しそうに細くなる。

「お待たせ」

まふい。停止。

「……………」

「まふい？」



「ヨル」

「うん」

「上着着て」

「暑いよ」

「着て」

「なんで」

「見られる」

「海だから普通でしょ？」

「駄目」

「何が！？」

レモンが横から口を挟む。

「独占欲」

「レモンは黙って」



「はいはい」

ヨルはため息をつきながら笑った。

「まったく……」

そして、まふいの額を軽く指で弾く。

「今日はみんなで遊ぶの」

「……ヨルと？」

「みんなと」

「……」

「そんな顔しない」

ヨルが手を差し出す。

「でも、まふいとも一緒」

まふいはその手を見る。握る。

「……ならいい」



レモン。

「ちょろ」

「聞こえた」

「逃げよっと」

2 ビーチバレー大戦

十人を二チームに分けた。

ヨルチーム

ヨル

トムカス

いんカス

あめちゃん

ごま塩



まふいチーム

まふい

レモン

ゆうカス

にゃんこ

なっち

「勝った方は？」

なっちが聞く。ヨルが考える。

「アイス奢り」

「誰が？」

全員がヨルを見る。

「……私？」

「総帥ですから」



いんカス。

「理不尽じゃない？」

「総帥ですから」

トムカス。

「便利な言葉にしないで」

試合開始。レモンのサーブ。あめちゃんが拾う。

「ヨル！」

「任せて！」

ヨルが跳ぶ。

「待って！」

全員が叫んだ。ヨル、空中で停止。

「え？」

「本気禁止！」



「まだ何もしてないよ!？」

「ヨルの普通は普通じゃない!」

レモンの抗議により――

《ヨル：身体能力制限》

が追加された。

「総帥なのにハンデゴマ」

「悲しい」

次。ゆーカスが強烈なスパイク。いんカスが拾う。

「ナイス!」

「ゆーカスの癖は知ってるから」

「俺のこと見すぎじゃない?」

「付き合い長いから」

「照れる」



「なんで？」

トムカスが叫ぶ。

「試合中にイチャつくな！」

「「イチャついてない」」

また揃った。

次。あめちゃん。

「にゃんこー！」

「何よ！」

「いくよー！」

「来なさい！」

真正面からスパイク。にゃんこが完璧にレシーブ。

「どう！？」



「さすが相棒！」

「べ、別にあんたのために取ったわけじゃ——」

ボールが戻ってくる。

「にゃんこ後ろ！」

「え？」

ぽこん。頭に直撃。

「……………」

「にゃんこ？」

「笑った？」

「笑ってない」

「笑ったでしょ！」

「ごめんなさい！」

再び追いかけて。試合放棄。



そして、ごま塩。

「必殺——」

「固有スキルは禁止！」

ヨルが即座に止める。

「まだ名前も言ってないゴマ！」

「海水浴で切り札出さない！」

「なら通常攻撃ゴマ！」

ジャンプ。空振り。そのまま砂へぼすっ。沈黙。なっちが駆け寄る。

「ごま塩！」

「……ゴマ」

「生きてる！」



「砂が美味しくないゴマ」

「食べないで！」

最後。マッチポイント。まふいがトスを上げる。なっちが跳ぶ。

「お姉様あああ！」

「なっち！？」

「勝負です！」

渾身のスパイク。ヨルが受ける。ふわっ。ボールが上がる。トムカス。いんカス。あめちゃん。全員が繋ぐ。最後はごま塩。

「今度こそゴマアアア！」

ぽこん。ネットをギリギリ越える。

「えっ」



まふいが手を伸ばす。届かない。ぼす。試合終了。一秒の沈黙。

「……勝ったゴマ？」

ヨルチーム全員。

「勝ったー！！」

ごま塩が胴上げされた。

「高いゴマァァ！」

3 スイカ割り

午後。主役はトムカス。

「なぜ俺なんだ」

目隠し。棒。スイカまで約十メートル。

「右！」



レモン。

「左！」

ゆーカス。

「そのまま！」

いんカス。

「後ろ！」

あめちゃん。

「前！」

にゃんこ。

「回ってください！」

なっち。

「突撃ゴマ！」

ごま塩。トムカスが止まる。



「……誰を信じればいい？」

ヨル。

「レモンじゃない？」

「なぜだ」

「一番トムカスのこと見てそうだから」

「ヨル！？」

レモンが珍しく焦る。トムカスの口元が少し上がる。

「じゃあレモン」

「……何」

「指示頼む」

「……………まっすぐ」

「了解」

「あと三歩」



一歩。二歩。三歩。

「止まって」

トムカスが止まる。

「振って！」

振り下ろす。パカン！綺麗に割れた。

「おおー！」

目隠しを外す。レモンと目が合う。

「さすが」

「お前の指示が良かった」

「……そういうこと普通に言うんだ」

「何が？」

「なんでもない」

レモンが視線を逸らした。その頬が少しだけ赤い。あめちゃん。



「おおー」

にゃんこ。

「おおー」

なっち。

「おおー！」

ごま塩。

「青春ゴマ」

「うるさい！！」

今度はレモンが叫んだ。

4 海上・ゆうカス VS いんカス

「勝負しよう」

ゆうカスが言った。



「いいよ」

いんカス。沖に置かれたブイまで泳いで往復。スタート。

「よーい！」

なっちが手を上げる。

「スタート！」

二人が同時に海へ飛び込む。速い。ほぼ互角。折り返し。ゆーカスがわずかに先行。だが――

「！」

波。体勢を崩したゆーカスの腕を、いんカスが掴む。

「大丈夫？」

「……競争中だけど」

「溺れたら勝負にならない」

「優しいね」

「普通」



「惚れそう」

「やめて」

二人同時に笑う。そのまま再スタート。結果——同着。浜辺。
トムカスが腕を組む。

「お前ら絶対わざとだろ」

「何が？」

「同着」

「偶然」

「本当に？」

「「本当」」

「息ぴったりすぎるんだよ！」



5 あめちゃん VS にゃんこ

砂浜。にゃんこがタオルを被って座っている。

「疲れた」

あめちゃんが隣へ。

「楽しかった？」

「普通」

「めっちゃ笑ってたけど」

「笑ってない」

「写真あるよ」

「消しなさい」

「やだ」

「消して」

「宝物にする」



「……！」

にゃんこが固まった。

「な、何よそれ」

「相棒が楽しそうにしてる写真だから」

「……………」

「にゃんこ？」

にゃんこは顔を背ける。

「……好きにすれば」

「やった」

その数秒後。にゃんこが小声で言った。

「……あとで送って」

「え？」

「聞こえたでしょ！」



「はいはい」

「ニヤニヤしない！」

二人の肩が自然と触れる。しばらく、そのままだった。

6 ごま塩となっち、遭難する

「お姉様に貝殻をプレゼントします！」

「協力するゴマ！」

二人は貝殻探しを開始した。五分。十分。十五分。

「綺麗なのありませんね」

「こっちにありそうゴマ」

さらに移動。そして――

「……………」

なっちが振り返る。



「みんな、どこですか？」

「……………」

ごま塩も振り返る。

「遭難ゴマ」

「砂浜で！？」

実際には百メートルほど離れたただけだった。そのころ。ヨル。

「なっちとごま塩は？」

全員。

「……………」

三秒後。搜索開始。ほどなくして。

「お姉様あああ！」

なっちが走ってくる。

「なっち！」



そのままヨルへ抱きつく。

「遭難しました！」

「百メートルだよ!？」

「心細かったです！」

ヨルが笑いながら頭を撫でる。

「はいはい。無事でよかった」

なっち。満面の笑顔。

「えへへ……」

その後ろ。ごま塩。

「ヨル」

「ん？」

両手を広げる。

「ごま塩も遭難したゴマ」



「自力で帰っておいで」

「格差ゴマ!？」

全員爆笑。

7 水鉄砲戦争

事件は突然起きた。ヨルがパラソルの下で飲み物を飲んでいる。そこへあめちゃん。水鉄砲を構える。

「総帥」

「ん？」

ぴゅっ。ヨルの頬に命中。

「……………」

「……………」

あめちゃん。



「逃げろー！」

ヨルが立つ。笑顔。

「戦争ね」

十分後。砂浜は戦場になった。ヨル＆なっち。まふい＆ごま塩。レモン＆トムカス。ゆーカス＆いんカス。あめちゃん＆にゃんこ。五組に分かれて大乱戦。

「お姉様！ 右！」

「了解！」

ヨルが回避。なっちが援護射撃。

「完璧！」

「やりました！」

ハイタッチ。

まふい。



「ごま塩」

「ゴマ！」

「囧になって」

「扱いが雑ゴマ！」

「大丈夫」

「何がゴマ！？」

それでも走る。

「突撃ゴマァァァ！」

集中砲火。

「ゴマァァァァ！」

その隙にまふいが全員へ反撃。

「作戦成功」

「ごま塩の犠牲の上に成り立ってるゴマ！」



レモンとトムカス。背中合わせ。

「右お願い」

「任せろ」

「左来るよ」

「分かってる」

息の合った迎撃。レモンが笑う。

「結構いいコンビじゃない？」

「今さらか？」

「……そういうこと言う？」

「事実だろ」

「あとで覚えてて」

「何を？」



「知らない」

ゆーカス&いんカス。左右から同時射撃。

「三、二、一」

「今」

完全同期。

「強っ！」

あめちゃんが逃げる。にゃんこが前へ。

「私に任せて！」

盾代わりの浮き輪。ばばばばばっ。

「にゃんこ！」

「今よ！」

「了解！」



あめちゃん反撃。ゆーカス&いんカス。

「撤退！」

また完全同期。

そして最後。ヨルとまふいが向かい合った。水鉄砲を構える二人。

「まふい」

「ヨル」

「勝負？」

「望むところ」

数秒。睨み合う。まふいが先に動く。ヨルがかわす。ヨル反撃。まふいも回避。

「おおー！」

全員が観戦を始める。しかし、足元に波。ヨルの足が滑る。



「わっ」

まふいが反射的に水鉄砲を捨てる。ヨルの身体を支える。

「ヨル！」

「……ありがと」

顔が近い。

「……………」

「……………」

周囲が静かになる。レモン。

「続けていいよ」

ヨル。

「何を！？」

まふい。

「私は構わない」



「まふい!？」

全員爆笑。勝負は有耶無耶になった。

8 夕暮れ

午後六時。太陽が海へ沈み始める。十人は横一列に座っていた。ヨル。まふい。レモン。トムカス。ゆうカス。いんカス。あめちゃん。にゃんこ。ごま塩。なっち。今日は誰も戦っていない。誰も傷ついていない。ただ遊んだだけ。

「また来ようね」

ヨルが言う。

「もちろん」

レモン。

「次は勝つ」

トムカス。



「何に？」

「全部」

「子供じゃん」

「うるさい」

ゆうカスが笑う。

「次は二人乗りの浮き輪持ってこよう」

いんカス。

「なんで二人乗り？」

「一緒に乗るから」

「俺と？」

「他に誰がいるの」

「……まあいいけど」

あめちゃん。



「にゃんこ、次も来る？」

「……暇だったら」

「来る？」

「暇だったら！」

「来るんだ」

「うるさい！」

ごま塩。

「次までに泳げるようになるゴマ」

なっち。

「私が教えます！」

「なっち泳げるゴマ？」

「……………」

「なっち？」



「浮き輪があります！」

「仲間だったゴマ」

そして、まふいはヨルの肩へ頭を預ける。

「ヨル」

「なに？」

「楽しかった」

ヨルが少し驚く。それから笑った。

「そっか」

「でも」

「うん」

「次は二人で来たい」

「みんなで来ようね」

「……………」



「そんな顔しないの」

ヨルがまふいの手を握る。

「二人でも来ればいいでしょ」

まふいが顔を上げる。

「……約束？」

「約束」

指を絡める。まふいの表情が、ほんの少しだけ緩んだ。レモンが横目で見える。

「はいはい、ごちそうさま」

「レモン」

「聞いてませーん」

そのとき、ごま塩が叫ぶ。

「集合写真忘れてるゴマ！」

全員。



「——あ」

夕陽を背に十人が並ぶ。ヨルが中央。その隣を当然のように確保するまふい。反対側にはレモン。レモンの近くへ何となく立つトムカス。ゆーカスといんカスは肩を組む。あめちゃんがにゃんこを引き寄せる。

「近い！」

「写真くらいいいじゃん！」

「もう……」

なっちはヨルの近くへ潜り込もうとして——まふいを見る。
まふいも見る。

「……………」

「……………」

なっち、一步後退。



「今日はここで大丈夫です」

「なっち!？」

最後にごま塩が前へ。

「センターは任せろゴマ!」

「そこ私の前!」

ヨルが笑う。

「いいから撮るよ!」

セルフタイマー。十秒。九。八。その瞬間、ごま塩が砂に足を取られる。

「ゴマ!？」

なっちまで巻き込まれる。

「きゃっ!」

あめちゃん爆笑。にゃんこも堪えきれない。ゆーカスといんカスが二人を助けようとして、トムカスが呆れ。レモンが笑



い。まふいがヨルの腕を掴み。ヨルも——声を上げて笑った。
三。二。一。カシャ。

完璧に整った写真ではなかった。半分は笑っていて、二人は
転びかけていて、一人は呆れていて、一人はヨルにくっつい
ている。でも、十人全員が写っていた。後日。その写真は本
部へ飾られた。十脚の椅子が並ぶ部屋。その壁に。

戦っていない十人の姿が、一枚増えた。誰かが英雄だからで
も誰かが強いからでもない。ただ——十人で海へ行った。そ
れだけの日。だからこそ。きっといつまでも覚えている。

——完。

